

このページは、東亜天文学会発行『天界』2002年11月号に掲載されたものです。

芸西天文台見学記

松本敏一 T. Matsumoto
(福井県武生市)

9月14日、大阪支部が計画された「芸西天文台訪問ミニツアー」に、彗星課幹事の江崎氏から誘いを受け、大阪支部と伊賀上野支部の方々に合流して見学した。

私達は、はやる思いを胸に、一路芸西天文台へ向かった。天文台には関課長宅から車で約50分で到着した。日当たりの良い山の斜面の高台にあり、南には太平洋の海辺が開け、北の山は高く迫っていた。また西の眼下には野菜栽培のビニールハウスがびっしり敷きつめられていて、反対の北東は北からは山がせり出していた。東から南西までの視界は良好だ。課長の話では、カノープスが高く見られ、その色も青く見ると聞いてびっくりした。

五藤光学製60cm反射望遠鏡の納まっているステンレスドームの輝きが印象的で、ドーム内は、狭くもなく広くもないという感じだ。60cm望遠鏡を設計された東京の望月氏は、20数年ぶりに対面し、望遠鏡を懐かしそうに見上げていた。頑丈に作って欲しいという要望だったので、実際に望遠鏡の上にぶら下がって試したそうで、またバランスをとる設計に一番苦労したと言っていた。その天文台の南に、天文学習館があり、6mドームのすぐ南には、ブロック造りの天体観測所と、それぞれ3棟が並んでいる。一番南の天体観測所には、長年使っていた40cm反射に代って、ニコン12cm双眼鏡、イプシロン21cmがごちんまりと納まっている。宿泊もでき、冷蔵庫も完備して、うらやましい施設だ。施設の周りもたくさんの木が生い茂っている。眼に飛び込んでくるひとつひとつが懐かしく見え、とても時間が足りなかった。寒蝉が夏を惜しむかのように、さかんに鳴いていた。

薄い記憶の中、特に印象に残ったのはニコン12cm双眼鏡のファインダーだ。直径2センチ、長さ30センチぐらいの棒を、接着剤でしっかりと双眼鏡に貼りつけただけの実に簡単な物だが、指し示すとおり覗くと、棒の先端が細くなって見え、既成のファインダーより使いやすいようだ。ちょっとしたことだが、凄い。海の影響で古色した現役の12cm双眼鏡、またスケッチ用紙や小さな鉛筆にいたるまでが、私を引き止めて立ち去れず、天文学習館での話には、ずいぶん遅れて入館した。

すっかり暗くなり、学習館では、岡村啓一郎氏が「江戸時代土佐の天文・暦学界」という題で話をされたが、岡村氏の豊富な史料収集に感心した。内容は「谷 泰山」「川谷薊山」「片岡春峰」「細川半蔵」という土佐の天文暦学会の人物についてであった。また、寛文4年に現れた彗星に関して、当時12才の少年の日記「素庵筆記」

に書かれた、スケッチと克明な記録を見せて頂いた。他では聞けない貴重な話だった。続いて、関課長が話をされたが、その中で「もう一度搜索に専念し、彗星を発見したい」と、意の内を明かされ、その熱い思いが伝わってくるすばらしい話だった。最後は村岡健治氏の、世界に1冊しかない古書や、バーナードの天体写真集など、3冊を持参しての話は、世界的に優れた計算家の別な一面を見せてもらった。いつしか外は小雨模様で、空の状態がまったく掴めないまま、芸西をあとにした。ホテルに到着したのは、高知城のライトアップが消える午前0時近くだったが、総勢21人での見学はたいへん楽しく、また賑やかであった。

明朝は、昨夜とうって変わって、青い空を背景に高知城がまばゆく見えていた。午前中は関課長宅への訪問。総勢18人の訪問で立錫の余地もなかった。しかし、奥様の手作りサンドの美味しさが、その不自由さを暖かく包みこみ家庭の様子が伺えた。課長を囲んで、眼視搜索、CCD観測、彗星の位置測定や軌道、古い方々の消息など盛りだくさんの話しが、きりもなく飛び交った。池谷薫氏のミラーNo.1が見られたこと、また最後に書齋に案内され、課長の普段の姿を伺いできたことは、何よりの土産となった。大阪支部長の鷲氏が言われるとおり、まさに「関塾」でした。帰りの飛行機から足下に見える海には、作日からの脳裏に深く刻まれたさまざまなシーンが、懐かしく映り、私の中の時間が、いつまでも止まっていた。

この二日間の見学ツアーでお世話下さった方々、高知の皆さまに感謝致します。



芸西天文台での記念撮影 2002.09.14